



TITLE:

総括・挨拶

AUTHOR(S):

湊, 長博

---

CITATION:

湊, 長博. 総括・挨拶. 京都大学附置研究所・センターシンポジウム: 京都からの挑戦 (第12回) 「地球社会の調和ある共存に向けて」 自由風格(フリースタイル)、京大--報告書-- 2017, 12: 143-144

ISSUE DATE:

2017-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/227541>

RIGHT:

---

## 総括・挨拶

京都大学研究担当理事・副学長 湊 長博

---

ご紹介いただきました京都大学の湊でございます。今日は本当に午前中から夕方まで随分長丁場でしたけれども、皆さん、このシンポジウムにお付き合いいただきまして誠にありがとうございます。

特に、今日はたくさんの若い高校生の諸君に来ていただいて、私ども非常に喜んでおります。ひょっとしたら中学生もいらっしゃるかもしれませんね。これについては石川県の教育委員会、それからご引率いただいた先生方には心からお礼を申し上げたいと思います。

今いろんな研究所の話が出ましたけれども、もちろん京都大学には、ほかの多くの国立大学と同様に学部もございます。医学部、法学部、文学部等々、私は医学部出身ですけれども、全部で10の学部があります。皆さんが、もし京大へ来られると、まず学部に入ることになります。

学部を終了すると次に大学院があります。私どもは大学院の学生が研究する場を研究科とよびますが、全部で15の研究科があります。それに加えて研究所あるいは研究センターというものがございます。現在20の研究所、あるいは研究センターが京都大学にはございます。今日のお話は、この研究所と研究センターからのものでございます。

この20という数は実は非常に多いんです。日本の大学では、東京大学なども含め研究所の数は大体一桁です。20もの研究所や研究センターがあるというのは非常に突出した京都大学の特徴だと言えます。

研究科・センターというのは、各々いろんな特色のある研究、非常に先端的な研究、あるいは、まだ誰もやっていない新しい研究を、多くの研究者が集まってやっている所ですが、これにはもちろん大学院生も加わっていきます。

研究領域というのは非常にダイナミックに動いていきます。大学にはもちろん100年単位でずっと続けられる基礎的な領域というものがあります。法学とか医学とかですね。ただ一方で、世界の状況は自然も社会も刻々と動いていきますから、そういった変化に対応するためにも、全く新しい研究というのが、どうしても必要になってきます。京都大学に研究科・センターが多いのは、最もこれに積極的に取り組んできた結果でしょう。京都大学の120年の歴史の中で、いろんな世界の状況に応じて、新しい研究科・センターが作られてきたわけです。

これはこれからも続きます。ひょっとしたら皆さんが、もし京都大学へ入学され、大学を終わって大学院に入られるころになると、もっと違う新しい研究所やセンターができているかもしれない。世界の動きに応じて、やはり研究というものも動いていくということです。

さて、京都大学には、約 3000 名の教員がいます。今日お話しいただいたのは、そのほんの一部の先生方ですが、こういう先生方が 3000 人も集まった大学というのは一体どういうところだろうと驚かれるかもしれませんね。極端なことを言えば、研究者は一人ひとりが自分の思いを持って研究しているわけですから、今日は皆さんいろんな興味深い話を聞かれたと思いますけれども、京都大学ではこれに加えて何千という研究テーマがあるというふうに思っていていいのだと思います。一人ひとりの研究者が、この地球のために、環境のために、あるいは社会やヒトのために、多様な研究をされているということになります。

総長も触れられましたが、京都大学というのは自由の学府であると言われています。本当にやりたいことや必要なことを、一人ひとりの研究者が自らの意志で自由に研究をする場であるということです。ぜひ皆様も高校を卒業されたら、京都大学へ来て研究に加わっていただきたいと思っています。

今日は、いろんな新しい聞き慣れない言葉がいっぱい出てきたと思います。「未踏領域」というのも、その一つかもしれません。これは、既存の学問をきちんと研究し力を備えた上で、まだヒトの手の届かないところ、あるいは誰も足を踏み入れたことのない領域へ果敢に踏み出して、新しい研究領域を開拓していくという意味です。もちろん研究者は自己満足のためだけに研究をやっているわけではありません。近いあるいは遠い将来に、地球や社会や人々のために、自分のやっていることを還元するという信念で皆さん研究をされているわけです。

今日は結構な年配の先生方が、君たち若い学生さんたちの前で、研究は「面白いぞ」あるいは「楽しいぞ」と、さかんに言われましたが、少し驚かれたかもしれませんね。大体は成人して社会へ出ていくと、人生はきびしいぞ、社会は甘くないし、仕事には責任が伴いきついぞ、といったことを言われることが多いかもしれません。そういう中で、自分たちが本当に面白いと思うことややりましょうという話は、格別であったかもしれません。

先ほど総長も、京都大学の理念について言われましたけれども、京都大学というのは「地球社会の調和ある共存」という大きな目標の下に、今日お話しいただいたような多くの愉快的な研究者がたくさん集まって、多種多様な面白くてしかも重要な研究を日々行っている共同体であるというふうに理解していただければいいと思います。

近い将来にまた皆さん方と、京都大学のどこかのキャンパスでお会いできることを心から楽しみにしております。

本当に、今日は長時間でありましたけれども、お付き合いいただきありがとうございます。感謝いたします。それでは失礼します。